

目次

まえがき

第一章 紀行文学とは何か

中世紀行文学の特徴 紀行は移動の世界を描いた文学  
文学の分類法 さまざまな紀行

1

第二章 旅と「歌枕」

紀行文学に不可欠な「歌枕」 信仰上の重要な場所 「歌枕」は地主神  
の名の間接的表現 神の縁語と結びついた「歌枕」 地主神は釈迦や菩  
薩の化身 「歌枕」と結びつけられた歌人たち 新しいジャンルを生み  
出した「歌枕」 「名所ならねばしひて心とまらず」 「歌枕」に対す  
る写実性と文学性 「歌枕」の地で用いられた「本歌取り」の技法 古  
歌を踏まえて旅した『東関紀行』の作者 紀行作家の地名への関心 自  
然界の中に西方浄土や観音を見る 「歌枕」は多次元の芸術

20

第三章 旅をした紀行作家たち

公人の旅びとと隠遁者の旅びと 高倉院の叡鳥詣でに随行した源通親  
諸国を長旅した隠遁尼二条 後鳥羽院の熊野御幸に随行した定家 実朝  
の死で出家した塩谷朝業の旅 東海道の文学に貢献した飛鳥井雅有 足

52

利將軍に随行した歌人たち 子を思う阿仏尼の直訴の旅 天皇を追って  
美濃へ旅した二条良基 一条兼良の美濃への旅 三条西実隆・公条の高  
野山・吉野への苦難の旅 武士・僧侶・連歌師に影響を与えた京極・冷泉派  
の歌風 今川了俊の九州と叡島への旅 漂泊する隠遁歌人たち 歌を  
政治・外交手段として利用した武家歌人たち 情報を提供した連歌師たち  
秀吉の出陣に随行した細川幽斎 楠長諳・蒲生氏郷・長嘯子の秀吉同行記  
世と僧門を捨てた隠遁者たち 隠遁者と宗教とのかわり 草庵を結ぶ  
ことは文明離脱の第一歩 隠遁文学は自然界からのメッセージ 老いて  
旅に出た隠遁者たち 時間と人生への意識は隠遁作家の特徴

#### 第四章 なぜ旅をしたのか

権力者の命令による旅 勅使の旅と忠誠の旅 天皇や將軍に随行した旅  
旅好きだった足利將軍たち 軍事遠征の旅 貴族文化を歌人に伝えさせ  
た地方の有力者たち 連歌師の隠密の旅 多くの紀行を生んだ社会不安  
「修行」のしきたりを受けた隠遁者たち 富士見物は平和と安定への願い  
隠遁者の参詣地、熊野と善光寺 「一所不住」のあてもない旅 旅を  
させた先祖崇拜の精神 歌人を旅立たせた死と年忌 さまざまな死が記  
されている「信生法師日記」 紀行作家たちの古戦場や戦没者への関心

#### 第五章 なぜ紀行は書かれたのか

読む人を意識して書かれた紀行 主君に差し出された随行記 歌の教本  
として書かれた紀行 勅撰集を意欲して書かれた紀行 歌に潜むはかり  
知れない力 紀行に扱われた「手向」の伝統 神仏両崇拜に用いられた  
歌 多くの隠遁者に扱われた奉納歌 祈願として利用された奉納の歌  
さまざまな目的による旅と紀行の動機

#### 第六章 西行の旅と人生と歌

二十三歳の若さで突然の出家 俗世から聖地への離脱の旅 高野山での  
三十年間の草庵生活と西国への旅 高野山から伊勢へ、そして奥州への勸  
進の旅 すべては「仏法修行」のための活動 「本地垂迹」説の実践者  
西行 月・悟り・經典についての詠作 西行の歌の源は「縁」 密教  
の修練の手段としての歌の使用 九歳の時以来西行に憧れていた二条  
十仏・長明・宗長、西行を慕って伊勢に向向 西行に影響された多くの歌  
人たち

#### 第七章 芭蕉の旅と中世紀行文学

飛躍的に旅の普及した時代に生きた芭蕉 中世の隠遁者に通じる芭蕉の出  
家と旅 自然との一致・人物との出会いに「誠」を発見 西行に深く影  
響された芭蕉 灯火の下で、目を閉じ頭をたたいて作句 過去を熟知し、  
意識していた芭蕉 芸術として書かれた芭蕉の紀行

#### 第八章 日本とヨーロッパの中世の旅と日記と紀行文学

自然と対話した日本人 自然賛美は神への冒瀆だったヨーロッパ 「世  
捨て」を描いた文学の誕生 自然観を変えたルネッサン期 難行苦行し  
て初めて自然と一体 「悟り」を得る場として自然を選んだ日本人 自  
然美に目を向けようとしなかったヨーロッパ人 目的のない参詣の旅か  
ら聖なる地への旅へ ヨーロッパ紀行にも見られる旅の苦しみや危険の歌  
浪漫主義時代になってから盛んになった名所・旧跡への旅 ガイド・ブツ  
クとして書かれたヨーロッパの参詣記 記録として書かれたヨーロッパの  
参詣記 死者の生涯を墓碑に描いた古代の絵日記 多くの日記・紀行を  
生んだ危機の時代 日記によって時を止めようとしたヨーロッパ人

第九章 まとめ

発見よりも伝統を重んじた旅 歌人と隠遁者では異なった旅の苦しみ  
「無常」を意識し、孤独に耐える隠遁者の旅びと

写真 | 長尾 宏

旅する日本人——日本の中世紀行文学を探る

## 第一章 紀行文学とは何か

### 中世紀行文学の特徴

本書で取り上げる「日本の中世紀行文学」とは、十世紀の平安時代中期から十七世紀の江戸時代初期にかけて著された、現存するおよそ七十余りの作品を指している。

これらの「紀行」と呼ばれる旅日記は、一般に、短編であり、都から出発した旅について、韻文と散文とで語られているという特徴がある。もちろんその特徴にも多くのバリエーションがあり、これからみてゆくように、紀行を簡単に分類することはできない。が、それにもかかわらず、紀行は長い間独立したジャンルとして認められてきた。

紀行がその独自性を有することは、十七世紀の『扶桑拾葉集』<sup>ふそうしゅうあつしゅう</sup>と十八世紀の『群書類従』<sup>ぐんしゆりゆう</sup>の二つの重要な叢書の中で、「紀行部」として独立した部を構成していることよって裏づけられる。しかし、これらの叢書が編纂されるずっと以前に、紀行は既に「御幸記」(天皇あるいは將軍の旅)、「道の記」(旅行記)、あるいは「詣」(参詣または巡礼)の記(巡礼記)などの表題がつけられ、普通の日記とは区別されていた。そしてこのような表題はしばしば、後世の書写者によってつけ

られたものであるが、これらの名称が示しているように、紀行が広く記録文学の中で、独自性を持っていたことを明らかにしているものである。

この独自性は多くの場合、もつと間接的に示されている。すなわち、紀行のために詠まれた歌が勅撰集や他の撰集に収められた場合、それらの出典は「道の記」(旅行記)として示されているのである。

紀行の作者たちは、紀行というものはつきりと一つのジャンルとして意識しており、彼らの最大の関心は、現実の個々の旅行体験を記録することではなく、歌や文章の中で、伝統的なイメージを用いて、伝統的な道筋を旅し、伝統的な風景をめめとしたのであった。写実への関心は薄く、事実はしばしば歪曲され、旅の随行者は孤独感を誇張するために無視され、伝統的な文学に現れない個所での滞在は語られなかったのであった。そして、たまたま本来の旅程から離れて違った旅をしたり、長期の滞在をした時には、しばしば別の紀行、あるいは滞在記を生み出している。つまり、旅そのものが作者にとって、独立した文学として扱われたのであった。

一般的に紀行は、故郷や都から遠く離れて行く旅に関するものであった。八世紀の歌集である『万葉集』の旅の歌(羈旅歌)の中で既に「離れて行く」旅が詠われており、十二世紀の歌人西行の私家集『山家集』の中でも、この「離れて行く」旅が強調されている。また往還の旅は、室町時代にはかなりひんぱんに描かれるようになったが、それらの紀行の中でも焦点はやはり復路よりも往路にあった。そして決った目的地のない紀行も、室町時代になると数多く現れるように